今日の福音書は、イエス様が、十字架にかかることが目前に迫って、エルサレムの都に入られた時のことです。この中に、大変有名な言葉が出てきました。24節25節です。

『はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。』

イエス様は、ご自分がこれから、十字架の死を遂げることになることを、このたとえで教えられました。十字架の死というのは恐ろしいことだけれど、この犠牲によって、人々に本当の命。神様と人々との親しい交わりが回復する。その大きな恵み、希望のためには、一粒の麦が、地に落ちて死ぬという犠牲が必要だ。もし、その犠牲になって死ぬ決断がなければ、何の変化もない、という教えですね。

ただ、私は、犠牲を払えば、新しい未来が開けるのか、と云えば、単純にそんな問題ではないと思います。犠牲と言っても、ある目的のために、自ら、今までのものを捨てる覚悟で行動することが大切であって、災害の犠牲者が出たというのだけでは、半分の犠牲にしかなっていないと思うのです。

先週の月曜日は、3月11日。東日本大震災から13年過ぎた日でした。東日本大震災は、大勢の犠牲者が出た出来事でした。このことを改めて思い返して考えたいと思います。今年の正月1日にも能登半島地震が起こったので、改めて13年前の出来事を考えたいのです。

震災から1年過ぎた時のテレビ番組で、こんなことを紹介していました。

東北のある村は、何度も津波にやられているんですね。明治時代に、大きな津波があつて、たくさんの犠牲者が出た。そこで、みんなは、津波の来ない高台に移り住むことになった。ところが、やがて、海に仕事に行くのに、時間がかかる。そして漁にでかけたら、もう他からの漁師が魚を捕っているのので、「これじゃだめだ」、ということで、また、津波の危険のある海の近くに住むようになった。

すると、昭和になって、また津波が来た。その時も犠牲者がたくさん出たので、前と同じように高台に住むことにしたが、いつの間にか、また、仕事の都合などで、海に近いところに家を構えて、そして、今回の大震災の津波にやられた、というのです。

津波の災害を受け、犠牲者が出た時、一旦は反省したかのように、別の生き方をしているようですが、いつの間にかそれを忘れて、また同じことを繰り返すのです。

私は大齋始日の礼拝で、悔い改めについてこんな話をしました。

今まで間違った方向に歩いていた者が、立ち止まり、正しい方向に向きなおって、歩みだすことを悔い改めと言います。今までとは違う、新しい生き方をしてゆくことが大切なのです。

間違っていたことを、ただ反省しても、それによって自分の生き方を変えて、別の方向に歩み出す行動がなければ、同じ間違いを繰り返すことになりやすいのです。

今日の福音書は、『一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。』と書いています。これは、殻に閉じこもった麦が、その殻を破って、芽を出し、根を張ってゆく、そのような姿勢に変わった時、大きな成長がある、ということを書いてあります。今まで通りのことを繰り返したのでは、結局殻に閉じこもっている、一粒の麦のまままだということなのです。

津波が襲ってきたので高台へ移ったが、やがてまた浜辺へ住むようになるのでは、犠牲者たちの死は何の意味もなかったことになる。高台で新しい生き方を考えなければ、悔い改めにはならない、ということです。

数年前、私は教区報に、「逆境の日には考えよ」という文章を書きました。九州教区を経済的に40年間支えてきた長崎の聖公ビルの家賃収入が2017年の11月から入らなくなったのです。そして、今年はその土地を医療関係の施設に貸して、新しい収益事業として始めます。しかしビルを倒した跡地を駐車場にしてしばらく経営しましたが、もう建物を持っていないので、新しい土地の地主になっても、以前のような収入は期待できません。教区はずっと何十年も手を付けなかった6000万円あまりの宣教推進基金のうち2000万円を一般会計の取り崩しができる資金に移しましたが、2年間でその半分くらいを使って、昨年末の決算では残り少なくなっているのではないかと思います。

同じことの繰り返しなら、元のままどころか、現在の状況も維持できなくなるような危機的状況にあるのです。教区は、今日の一粒の麦同様、今までの生き方を変えて、新しい歩みを始める必要ができています。

東日本大震災が発生した頃、話題になった「もしドラ」という小説があります。「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」という長いタイトルを省略して「もしドラ」と呼んでいるのですが、この小説で、今まで地方予選ですぐに負けていた高校野球チームを、優勝に導き、甲子園の全国大会に出場させる、という話になっているのです。

これは架空の話ですが、学ぶところがたくさんあります。私たちがいままで当たり前と思っていたことをひっくり返して、それで新しい道が開かれるという提案が出てくるのです。

たとえば、それまで、高校野球と言え、犠牲バントをして、ひとりアウトになっても、走者を次の塁に進めることが常識でした。また、ピッチャーは、打者にボール球を投げて、それを振らせるように努力していました。しかし、あの小説の中で、監督は、「ノーバント、ノーボール作戦」というのを打ち出しました。

「アウトカウントを自ら増やすような犠牲バントはしないで、積極的に大量得点を取って、ワールド勝ちを狙おう。」「夏の炎天下、ピッチャーに長い時間投げさせないで、投球はすべてストライクを投げる。それで打たせて、投球数を減らし、アウトカウントを増やそう。」というわけです。

これを「イノベーション」と呼んでいます。技術革新、経営革新などと訳されますが、新しい価値観で歩いていくことです。

それには、今までの先入観を捨てることが大切です。一粒の麦が、そのままだったら、一粒のままです。たとえ、たくさんの津波の犠牲者が出て、また同じ生活をしたのでは、新しい希望にあふれた世界は開かれてきません。

私は宮崎へ来た時、教区報編集の責任者、つまり広報部長を吉岡司祭から引き継ぎ、月1回の広報部会にみんな時間をかけて作業をしていることに大変意味があることを感じました。近くと言っても、隣の教会までは何十キロもはなれているわけですが、遠い福岡で集まってわずかな時間話し合いをするのでは、時間と交通費であるお金がかかりすぎる。

その後、世界的に新型コロナウイルスが流行して、県外への出張もできなくなりました。しかしそれによって、教区の会議も、教役者会も、そして教区会もリモートで行なったのです。

ところが昨年はまた前のように福岡に集まって時間ばかりかかる会議を行った。

そんな中で、私はこの3年半ほど、各信徒に毎週の説教を当日読んでもらえるように、文書活動に重点を移すようになりました。

たとえコロナウイルスがおさまっても、いろんな理由で教会に来ることができない人がいる。教会に来ても、牧師の説教が聞けない人もいます。そんな中で、以前とは違う教会のあり方を考えなければならぬ時に差し掛かっているのです。